

しゃもじはどこへ消えた？

mattyarion

しゃもじ - 1

ある日、朝起きると母が炊飯ジャーからスプーンで米をよそっていた。

「しゃもじは？」

こんな質問を人生で何度する機会があるだろうかと考えながら聞いてみる。

「しゃもじ？なにそれ？」

私は頭を抱えた。私の母はそんなに頭がおかしくはなかったはずだ。そうになると認知症とかボケがついに始まってしまったのだろうか。40代後半というのは少し早いのではないだろうか。もしかすると、何かの勘違いや疲れているだけかもしれない、と強引に自分を納得させることにした。

だが、それだけでは収まらなかった。昼休みに訪れた定食屋。どこにでもあるような定食屋だ。私は、サバの味噌煮定食を頼んだ。老人たちが見つめるTVには相撲の中継が流れ、隣の席ではスーツを着た中年の男が新聞を読んでいる。そして、カウンター席から見えるキッチンで亭主がごはんをよそっていた。そう、スプーンを使って。店主は日本人だったはずだ。日本人でスプーンでごはんをよそう人は、私の知るところでは少数波なはずだと思う。

「どうしてみんなしゃもじを使わないんだろうね？」

昼休みを終えて、友人に尋ねてみた。

「しゃもじ？なにそれ？」

「しゃもじは、ご飯をよそうときに使う...」

「それってスプーンのこと？」

「そうじゃなくて！あの聖徳太子が持っているのに似た形の！」

答えがしゃもじのなぞなぞを作っている気分だった。

「ああ、笏のこと？」

私より友人の方が博識のようだ。私はその場をあきらめることにした。

しかし、私の気持ちは治まらなかった。それは、夕食の和食バイキングの横においてあったものもスプーンだったことも一助となっている。私は、実際にしゃもじを作ることにした。

しゃもじ - 2

しゃもじを作るのは、予想通りに簡単だった。ホームセンターで手頃の厚さの木を購入し、切って角を丸めた。それを母に見せることにした。疑心暗鬼だった母は、不信がりながら使ってみた。しかし、水で洗うだけで簡単に米がくっつかないことに驚きを示した。そして、これがあるべき形だったのかというように、しっくりきたようだ。どうやら本当に存在自体を忘れてしまっていたらしい。

そして、私はそれを外にも持っていくと、友人にも大好評だった。そして、誰かが撮った写真がネットにあげられ瞬く間に話題となった。やがて世間で大ヒットとなり、たちまち私は発明家としてちやほやされるのであった。不思議な心持だった。自分だけカンニングをしたテストで満点を取ったようなずるさを感じていたが、罪悪感はあまりない。

そして驚いたことは、私の周りの人のみならず以外の人ほぼ全員がしゃもじの存在を忘れていたことだ。そうでなければ、こんなに話題になったりはしない。奇妙なできごとではあったが、私にとって悪いことはなにもなかった。

さいばし

それからしばらくたった。しゃもじもかなり普及し、炊飯ジャーから米をよそうのにしゃもじが使われる光景を取り戻したようだ。変わったのは私の知名度くらいだ。曇りの朝でも一日の始まり独特のわくわく感を味わえた。

今朝の朝食は、昨晚の残りのおでんだった。テーブルの上に大きな鍋がそのまま置かれ、そこから取り分けるのが我が家のスタイルだ。

「おはよう。」

と母はこっちを見ないで言った。あつあつに加熱した鍋は、まだ余熱を存分に発揮していて、その余熱に苦戦しているようだった。その鍋から、白滝だの豆腐だのを取っているわけだが、なぜか使っているのは短い箸だった。

「あれ、さいばしは？」

と私は言う前から、そういえば昨日の夕食で使ったのでまだ洗っていないのか、と予測した。それでも、あんなに熱そうにしているのなら、すぐに洗って使えばいいのにと考えた。

「さいばし？なにそれ？」

一通り思案を巡らせた後だった。予想外だが聞き覚えのある一言だった。

念のため、試してみることにした。

「さいばしってというのは、調理をするときに使う長いはしのことだよ。」

「ああ、お父さんのはしのことね。」

そうじゃない、という言葉は私は飲み込んだ。なぜならそれがおそらく無意味であることを知っているからだ。

念のために外でも確認してみることにした。定食屋の店主は、豚カツを熱そうにかつ器用に短いはしを使って油の中に入れている。夕食の野菜炒めを作る母のはしも、やはり短いままだった。それを見る私の眼は、困惑ではなく笑みでにやけていた。

私はどうしなければならないかわかっていた。さいばしを自作し、友人に見せ、私は再びその知名度を上げた。

私の心からは困惑が消えはじめ、やがて優越感に浸るようになっていった。次に消えるものはなにで、いつ来るのだろうと楽しみにもなった。

私は、この不思議な現象にうっすらと法則性を見出していた。しかし、それが確定かどうかをつかむにはまだ時間が必要だった。そしてこの仮説の上で、次のなにかが消える日を迎えた。

私は朝いつもより早く目を覚まし、キッチンへと駆け込んだ。戸棚を開け、冷蔵庫を開け、母の様子を確認した。しかし、異常が見当たらなかった。拍子抜けの気分だった。しかし、この現象がなくなったことに安堵感もまた覚えた。

それから何日かたった。ぼんやりと見ていたテレビには、台風接近のニュースが流れていた。テレビのアナウンサーがおなじみの台風中継をやっている。かっぱのフードを飛ばしながら、必死に現状を伝えている。中継には、出勤中のサラリーマンや女子高生が映っている。しかし、そこに映っている彼らはみんなかっぱを着ている。子供を迎えにきた母の持つ手には、やはり子供用のかっぱ。玄関に駆け出すと、玄関にはかっぱかけなるものが備わっている。

私は、ほんのちょっとした高揚感を感じながら、この法則から逃れられないことを理解した。